

論文

庄司総一の『陳夫人』に見るハイブリッド文化の葛藤

王曉芸

1. 『陳夫人』に関する出来事

庄司総一の『陳夫人』は日台結婚をテーマにした作品であり、1940年11月に東京の通文閣から第一部の「夫婦」が出版されると、たちまち台湾人と日本人の間に大きな反響を呼び起こした¹。それについての評論をまとめてみると、まず、台湾人の書評においては、日本人のまなざしで日台結婚を真正面から取り扱ったこと²や、日本人が「身を以て低いもの弱いものを引上げてやる」³高い次元で台湾人を導いていくという日本精神の表現が肯定的に評されている。一方、日本人の評論においては、「政策への多くの示唆を含むものとして」⁴台湾人にも役所の人にも読ませるべきだという評論や、台湾人の生活のありさまを「血のある深い理解と芸術的善意をもって掘り下げた」⁵などの評がある。また、翌年の4月23日から5月4日まで、『陳夫人』は森本薫・田中澄江が脚色、久保田万太郎の演出で東京の文学座で上演されている⁶。竹中信子によれば、この『陳夫人』の公演は好評で延長され、「新生新派でも大矢市次郎、森律子、花柳章太郎、柳永二郎によって上演された」⁷という。『陳夫人』に描かれた時代は大正初期から昭和十年にかけての20年間であり、1932年11月25日に日台共婚法が公布され、日台共婚によって日台融合をはかろうとする狙いが顕著化した時代背景と重なっている。『陳夫人』の文学座公演が延長された本当の理由は「帝都の新劇ファンに南進政策を啓蒙する役割」⁸を果たすことにあつたと考えられる。

また、呂赫若は同年の5月21日から25日にかけて「陳夫人」についての劇評—『陳夫人』の公演を「興南新聞」に発表した⁹。垂水千恵によると、呂赫若はこの小説および公演からの衝撃を「幾度となく反芻し、分析していく過程の中で、「財子寿」を初めとする1942年以降の諸作品の構想を得た」¹⁰と、『陳夫人』が当時台湾人作家に相当の影響を与えたことを述べている。また、尾崎秀樹は、新垣宏一の「城門」¹¹も「あきらかに『陳夫人』の影響

をうけている」¹²と、この作品の日本人作家への影響に言及している。そのほか、星名宏修も、この作品は「当時の「皇民文学」とは相反する方向性で、日本人と台湾人の間の「血の問題」を解決しようとした」¹³と評している。つまり、庄司総一の『陳夫人』は日台結婚を正面から描写する一方、異文化融合（混血融合）の可能性を示唆し同化政策の障壁を打ち壊そうとする効果があったのである。

42年7月に同じく通文閣から第二部の「親子」が出版され、のちに庄司総一はこの作品で大東亜文学賞を受賞した。『陳夫人』第二部は、第一部と変わらず注目を集めるが、実際には当時日台結婚によっても容易に日台の融合を促すことはできない、という多難の一面もこの作品によって示唆されている。例えば、『台湾文学』第二巻第三号の「文学鼎談」において、中村哲は「陳夫人を書いた庄司の問題のとり上げ方は認めるが、台湾に住む者としては現実的でない」¹⁴という評を述べている¹⁵。

ここでは、とくに異文化との摩擦、混血児の国家に対する帰属問題など植民地主義に関わる相克の諸現象に注目したい。また、張文環の『地に這うもの』の知識人像と同じく、この作品に登場した知識人は、皇民化運動に敏感に応えたのみならず、時には加害者に扮したアイロニーな存在でもあることを論じてみる。

2. 日台共婚のアイロニー

本論文は「主体的他者」と「客体的他者」（以下は「」を省略）の関係を巡り、植民統治のもとで両者がどのように自己異化をたどっていくかを論じようとするものである。そして、サルトルとフアンノの説を援用し、主体的他者と客体的他者の相克・補助関係を分析してみる。そもそも植民者が「文明」の代行者の姿で植民地に君臨した際に、彼らの目にした被植民者は未開の他者であり、客体でもある。しかも、この未開かどうかの判定は植民者の作り上げた主観的なコンテクストによって一方的に決められたものである。逆に、被植民者にしてみれば、こうした姿勢をもつ植民者は実際のところ外からの他者でありながらも、あくまでも主客転倒として主体性を有するものであることが強調される。このように頑として客体的で未開の他者を作り上

げることによって、植民者が植民地を統治する合理性は確立されるのである¹⁶。

サルトルは『存在と無』¹⁷において、対他存在としての自己が、他者の前で自分についての「羞恥」を感じつつ、他者の感情や性格を目標として努力することを示しているのだ。しかしながら、いくら努力したとしても、永遠にその他者になり得ないのである。なぜならば、その他者の承認がなければ、自己の努力は無駄であるし、他者に同化され得ないのも当然であるからである。一方、『ユダヤ人』¹⁸においても、サルトルは、立派なフランス人になりたがっている正統でないユダヤ人は、自分を一人の「フランス人」として正統の枠組み（キリスト教世界）に認めさせようと努力した時に、正統の枠組みに疎隔され続けることに気づかないまま、ユダヤ的な環境に定着し続ける宿命を負わざるを得ないとしているのだ。彼らは自分らがユダヤ的な質を有することが感じ取れないからこそ、ユダヤ人になる、という皮肉な事実が現されている。このような現象はファノンの『黒い皮膚、白い仮面』¹⁹にも描かれている。上手なフランス語を操ることによって、フランスの世界に近づこうとしたアンティル人の黒人は、自分の本当に欠如するもの（正統性）を痛感していないので、「フランス人になりたい」という妄想にとらわれているのである。サルトルとファノンが示すこうしたアイロニーな事実は、植民地における植民者／被植民者の相克関係を読み解く方法ともなる。

植民統治の権力関係を分析するとき、重要なことは、植民者であれ被植民者であれ、そもそも互いに相手にとっての他者という性格を持つという構造である。しかし、一旦両者に優・劣や開化・未開という二元対立の標識を付けると、劣性に見なされる被植民者の主体性は優性の植民者に奪われ、永遠に一つの客体的対象として存在せざるを得なくなり、植民者も、主体として被植民者を支配し続けることができる。そうでなければ、植民統治の正当性は解体してしまう。この背景の下で、宗主国の言語を習った客体的他者（被植民者）は、「たえずめざすところのものは、他者の感情、他者の考え、他者の意欲、他者の性格である」²⁰という主体的他者の客体になる。主体の枠内に入るために、客体的他者はさまざまな手段を用いて主体的他者への同一化を試みようとする。そこから、「文化的な臍帯」によって日本人化を図る工夫

は、台湾人が描いたコンテクストによって述べられている。それだけに、自分以外のもう一つの客体的他者を作り出すことを通して、工夫した主体性を意識的に強調しようとする傾向もある。言い換えれば、被植民者には「他者・客体」でありながらも、ときには「自己・主体」であるという主客転倒の二重構造があるのだ。ファノンも『黒い皮膚、白い仮面』において、宗主国のフランスから帰郷してきたマルチニックの黒人「帰朝者」は、フランス語を操ることによって自分の「優越感」を表しつつ、「同国人に対して批判的な態度をとる」²¹というイロニカルな事実を示している。実際、こうした主（自）・客（他）混淆の二重構造は植民地台湾における権力支配の一側面を語っていると言える。

「対自」²²が他者への同一化を試みる行為によって「対他」²³に自己存在の承認を認めようとする過程では、優性の主体それ自体も不可避免的に変化する。しかも、それは常に植民政策に伴って行われたものであり、そこに、「血統的な臍帯」による劣性の客体的他者を救済する植民者側が持ち出した混血政策が登場する。しかし、ここに一つの盲点があることを見逃さない。すなわち、植民統治の権力構造はあくまでも主/客、優/劣の相克のなかで構築されたもので、いくら努力しても「他者との合一は、事実上、実現されえないもの」であるのみならず、「権力上からいっても実現されえないもの（傍点は日本語訳のまま）」²⁴であるからだ。その原因は、両者が「同化するならば、その結果、必然的に、他者のもつ他という性格は、消滅してしまう」²⁵ようになり、植民者をもつ客体的他者を開化させるという「正当性」も自ら放棄することになるからである。

ここで、まず、作品の粗筋を見てみよう。

日本人女性安子は教会で台湾人の陳清文（帝大の法科学生）と知り合い、恋に落ちる。彼女は両親の反対にも関わらず、清文と結婚して風俗習慣も言語も異なる植民地台湾にやってきた。そこで安子を待っている陳家の成員は、老荘の無為思想にふける陳一家の家長阿山、土着信仰に迷信的にこだわるその妻の阿嬌、何より金銭至上の次男景文と浪費癖をもったその妻の玉簾、そして、唯一安子のことを心から歓迎した三男の瑞文とその平凡な妻春鶯であ

る。しかし、清文は陳一家における長男であるが、実際のところは阿嬌の実子ではなく、阿山と玉女という女中との間に生まれた子である。最初、この陳一家は安子のことを受け入れずに、彼女を異質なものとして扱っていた。

「日本精神」を積極的に追求する清文は陳一家の生活を向上させるため、安子にその指導をさせようとするが、彼の生意気なところがかえって家族の反感を買ってしまった。ゆえに、安子は清文のような過激なやり方を取らなかった。第一部の「夫婦」は、日台結婚から生じた家族の葛藤と不調和が描かれたものである。また、その問題は第二世代まで続いていくことが分かる。

第二部では、新しい精神的な試練に立ち向かうため、清文はパイン缶詰事業を起すことに決める。その「陳清公司」の成立によって、しきたりに包まれた陳一家も古い殻から抜け出せるようになった。一方、安子と清文の間に生まれた娘清子は、自分の混血児の身分に悩まされる。彼女は父親の台湾人身分を意識してそれに反発していた。台湾におけるすべてのパイン缶詰会社が台湾鳳梨株式会社に合併されるので、清文は「陳清公司」を閉めざるをえなくなった。それとともに陳一家は分家することになった。これをきっかけに清文が家族を連れて南洋へ行こうと計画するのを見て、安子はこれで娘の清子が精神的に解放されるようになり、家族三人も安堵の生活を送ることができると、心の中で期待している。しかも、彼女はこれに欠かせない重要な要素は「愛」だということを悟っている。

十年近い日本での生活を終え、日本人の妻を連れて台湾に帰ってきた主人公の陳清文は、故郷へ帰る途中、近代化のシンボルである台湾総督府を目にした時、近代化への渴仰が抑えきれなかった。彼にとって総督府に勤めることはこれからの目標であり、その望みの背後に隠されていたのは台湾式の古臭い生活への嫌悪である。彼は実家に帰って「自分が生まれて育ったこの家や部屋が何だか異国風に見え、居心地のわるさと不自由を感じてゐる」ような気がした。しかし、こうした近代化への憧憬を一方的に抱くことは、実際のところ皮相な欲求にすぎない。『黒い皮膚、白い仮面』において、ファンロンは植民地の「母国」で教育を受けてから再び、自分の出身地へ帰ってきたアンティルの黒人は、批判的なまなざしでアンティル式のあらゆるものを「黒

人の家族、未開家族」のものとして見なしていると示している²⁶。アンティルの黒人は「母国」（＝植民宗主国）の言語を操ったり、「母国」の服装をしたりすることによって、同じアンティル人との差を意識的につけようとした。陳清文はまさにそのようであった。

…彼は台湾人の文化の低劣を怖れてゐる。愛情を忘れて軽蔑感のみが先に立つ。彼は陳家の生活向上改善などにたゞ口先で云ふばかりで手の方はよごすのを怖れて引っこめてゐるのだ。文明といふ気取りの手袋をはめ眉を顰めながら彼等の塵を扱はうとしてゐるだけであつた。実は家族の者達なぞ眼中になく、自分達夫婦二人だけの生活を高め美しくすることに急だつたのだ。一方にはまた、かうして自己を社会に押し出すことにばかり気をとられてゐるのだつた。…（中略）

それにも拘らず、清文は内心焦つてゐた、高等官任命がどうも遅いなどゝやきもきしたり、自分の価値を誰も認めてくれないのではないだらうかといふ不安に怯えてゐる。民族的な偏見からであつた。²⁷

清文は自分が「文明人」であるを意識し、「台湾人の文化の低劣を怖れて」おり、「愛情を忘れて軽蔑感のみが先に立つ」態度を取っているが、その優越感をもつ感情と生活態度は家族の皆に不快感を与えただけでなく、高等官に採用されないことが明らかになった時、その「文明人」としての仮面自体が剥がれてしまう。台湾式の生活に軽蔑の態度を取つた清文は、加害者でありながらも、高等官任命から外された被害者の影も秘めている。要するに、日本人として誇りを持って生きようとする理想図は、ほかならぬ彼の過剰意識によって構築されたものに過ぎず、統治側にしてみれば、彼を本当の日本人として取り扱うことは到底在り得ないことであつた。前にも取り上げたように、いくら努力しても、客体的他者は主体的他者に同化され得ないからである。夫の官僚生活が挫折したことが分かつた安子は、「いくら努力しても焦つても、やがては越えることの出来ない障壁が立ち塞つて、彼の前進にもまた一定の限度が与えられてしまふだらう」という現実を考える。その「一定の限度」はすなわち血の問題であり、清文は日本式の教育を受け、台湾的な質

を取り除いたとしても、日本人としての権利は有していない。清文自身もその永遠に越えられない血の障壁に気づき、「僕の中に流れてゐる血といふやつに克つことが出来」ず、「僕は南支那人の血を受け継いでゐる」と反省している。しかし、こうした痛感も妻の安子の前では、素直に「民族的な偏見」として見なすことができず、彼はそれを「個性の問題」に帰しただけである。その体裁ぶった理由には実際「偽りがひそんでゐる」ので、彼を苦しめる。強いて言えば、日本的な思想を持っても日本人扱いされない一方で、家族と相容れないというジレンマの困窮に陥った清文には、「ネーション」というイデオロギーが欠落していたと言える。

(1) 「内台一如」の表と裏

実は、庄司は日台共婚の可能性をこの作品を通して描いているが、共婚した当事者がすぐに直面した不公平な戸籍問題を明確には描いていない。当時台湾においては、日本人女性が台湾人男性と結婚したとしても、その戸籍は日本に残されており、台湾に移すことは禁止されていた「二元的な戸籍制度」が採られていた。これについて近藤正己が『総力戦と台湾』²⁸において次のように述べている。

つまり、台湾人が日本本土の戸籍へ移る「転籍」は許されなかったために、「内地人」と「本島人」とでは同じ「帝国臣民」といわれながらも、戸籍によって表された法的な身分には相違があった。そのことの意味は、たとえば外国人が帰化して日本国籍を取得した場合、次代の子孫からは戸籍のうへでは「内地人」とまったく変らなかったが、植民地出身者が日本本土に身を移動しても戸籍は「内地」に移らず、その子孫も親同様に植民地の戸籍のままであるということであった。つまり、戸籍は二元制が貫かれていたために、「内地」と植民地では相互に入り込むことができず、植民地統治下の「新附の民」は日本人としてのさまざまな法的権利を享受できなかった。(傍点は筆者)

日台共婚しても、戸籍的には認められなかった事實は、『地に這うもの』

に描かれている、改姓名制度によって生じた「丸台日本人」²⁹という滑稽な問題と同様である。1932年11月26日に「内台共婚法」³⁰が公布されたことに応じるため、同年「本島人の戸籍に関する件」という律令第二号も定められた。近藤正己はこの律令第二号は「戸口調査簿を戸籍に準ずるものとして「内台共婚」を認めた暫定的な措置で、完備した戸籍制度ではなかった」³¹と指摘している。竹中信子の『植民地台湾の日本女性生活史』によれば、当時、『台湾日日新報』に何組かの日台共婚の当事者（日本人女性と台湾人男性の縁組）にインタビューをした記事が載せられており、そこには「結婚しても入籍できないので、東京の両親は内縁のようだと心配している」「共婚法は、私はあんな姑息的な共婚法を制定するより、なぜ台湾に早く戸籍法を施行しないかと反対意見を述べたことがある」「既婚十年、台湾化して和服は滅多に着ません。入籍は未だ出来ません。…今日の状態では内台結婚はお奨めしかねる」³²など、当事者である日本人女性の共婚に関する所感が記されている。共婚法、改姓名制度などの同化政策が実施されたことによって台湾の家庭制度、血縁関係なども崩壊してしまい、さらに日本語の常用や和服の着用という日本式の生活に変ったが、台湾人はただ「新附の民」であり、あくまでも本格的な日本人ではない、という趣は当時の日本人作家の作品によって描かれている。すなわち、客体的他者である台湾人は、あくまでも「他者との合一は、事実上、実現されないもの」なのである。『陳夫人』において、清文と安子の結婚は、清文の台湾人の身分ゆえに最初から安子の両親に反対され、二人は内縁の関係であった。しかし、自分が妊娠したことが分かってから、一層この関係を不安に感じた安子は、日本の両親に「一イマクスリヤニクスリカヒニユク」といった電報を打ち、辛うじて両親の承諾を得て「父から印鑑が送り届けられ、結婚手続きが済まされた」のである。日台結婚に隠された不公平な戸籍問題について、「結婚手続きが済まされた」という取り扱い方で簡単に描写してすませたことから見れば、この問題を意識的に粉飾しようとした庄司の作家姿勢を読み取ることができる。1940年に至っても、戸籍の相互移動を認めようという主張は1940年4月28日の『台湾新民報』の社説によって唱えられていたが、こうした社会からの要請に直面しても総督府は「終始消極的」な立場に立ち、「同化がもつ権利の側面に対しては終始、頑強

に拒みとおした」³³態度を取っていた。その実相によって客体的他者があくまでも主体的他者の枠組みから排除される、という当局の捉えていた態度は明らかであった。尾崎秀樹は、庄司の『陳夫人』は「台湾に育った作家の一人として、書きのこさなければおれない」³⁴作品であると述べているが、その作者としての立場には、サイドが『オリエンタリズム』で指摘しているオリエンタリストの「東洋」についての描写と異曲同工の趣があると考えられる。つまり、いくら「台湾に育った」といっても、庄司は主体的他者のまなざしで台湾でのさまざまな体験を見取り、客体の台湾に発声の権利を与えようとしなかったのである。例えば、作者は安子の言葉を借りて次のように夫の清文に語っている。

「…あなたが本島人でわたしが内地人だと云ふことは、私達の真の生命(ママ)には何の関係もないことぢやありませんか。神は凡ての民を一つの血によって作るといふこと、聖書に教へられるまでもなく私どもはよく知つてゐるはずでせう。人間と犬との関係では何事も起つて来やしないわ。同じ血で作られた人間が、国の界を定められ、言葉や風俗を異にするとところに意味があるのぢやないの。そこには当然いろんな摩擦が起きるでせんけれど、でも、それを救ひ難い不幸だとは私は考へたくないの。少なくとも魂を擦りへらし信念を押潰すほどの悲劇や不幸とは…」³⁵

安子の言葉には、台湾人が浴びせた差別待遇という肝心な点を避け、当局の唱えた「一視同仁」のスローガンに同調する響きがある。たとえ「摩擦が起きる」ことがあったとしても、それは決して「救ひ難い不幸」ではなく、「一つの血によって作」られた日本人と台湾人は、そのうちに解決の道を見つけることができるようになる、という作者の期待が隠されている。さらに、彼女の「激しい情熱、正確な理論、力強い悲壯な調子」に対して清文は「口を挿しはさむ余地が全然与へられなかった」。安子のその「同じ血で作られた人間が、国の界を定められ、言葉や風俗を異にするとところに意味がある」と言ったことには、同じ人間であっても優劣の差異性があり、それをもって次

元が高い者が次元の低い者を導くことはそれ自体の意味がある、という植民統治の正当性を強調したニュアンスが潜んでいる。

また、清文のように主体的他者である安子の前に、沈黙を守ることしかできないもう一人は瑞文である。陳一家において唯一安子のことを心から歓迎し、安子が困ったときにかばってくれたのは三男の瑞文である。彼にとって安子は「顔も心も白い胡蝶蘭のやうに清くて美しい」象徴である。陳陣を妾にすることが決まったとき、「あなたがお妾をこさへる人だとは思はなかつた。あなたもやつぱり本島人なのね」と安子に言われた瑞文は「弁解も出来ず怒りも出来ず、ただ羞恥と困惑で面を赤らめるばかり」であつた³⁶。「安子に対しては全く無抵抗な態度を示すのが常だ」という瑞文の反応は、まさに主体的他者の前で、自分の羞恥を痛切に感じた表現だと言えよう。「あなたもやつぱり本島人なのね」と語つた安子には、陳一家の皆を真の家族、真の日本人として見なす思いがない証拠であり、「やつぱり本島人なのね」という言葉には差別意識のニュアンスがあると考えられる。

とはいえ、そもそも安子と清文との結婚生活は順風でなく、大家族の陳一家へ嫁いだ彼女は、最初、姑の阿嬌と景文の嫁玉簾から嫌がらせを受けたことがある³⁷。しかも、陳一家によそ者として見なされている安子自身も、時にはノスタルジアに陥つたことがある。例えば、産褥熱になつたときの「アサツキが食べたい」と言つた「激しい郷愁の潜在意識」の現れや、一家団欒の祭日である中秋節に、彼女は台湾式の行事と季節と疎外感を抱き、異邦人としての郷愁にまとわりつかれたことはその例である。

安子はその騒ぎを白々とした気持ちで眺めながら自分の孤独がひとしほ強く感じられるばかりだつた。内地の親兄弟や親しい人々のことがしきりに思ひ出され、日一日と彼等から遠く離れて忘れられていく運命の悲哀に心が疼いた。かうした郷愁を彼女は病床の無意識で訴へたけれども、それ以前にはそれは心のづゝと奥に沈んでゐた一つの不幸であつたので、精神生活そのものに支障を来すほど表面に現れてこなかつたのだ。清文は藪をつゝいて却つて蛇を出したやうなものだつた。³⁸

「内台融合」という同化の基調に基づいて描かれた日台共婚の青写真に、「郷愁」「孤独」、または「運命の悲哀」「不幸」などの情緒も織り込まれたことは、植民地台湾を日本本土の延長線として築き上げようとした総督府の同化政策が不成功であったことを裏付けている。

日本の家族に「忘れられていく」恐れと、台湾の婚家に対する疎外感に挟まれた安子は清文と同じく、これからの自分が何処の「ネーション」に帰属すべきか、という問いに答えを見つけようと努力せざるをえなくなる。

(2) 旧家庭秩序の崩壊

日台結婚の表裏には皮相な面があったものの、台湾式の家族制度は帰するところ皇民化の力に抗えずに、崩壊せざるをえなかった。庄司は主人公の日台結婚という質的な変容で異民族融合の可能性を示しているほか、それが形の上にも変化をもたらしたことも描いている。それは陳家の人々が安子のために洋風の二階建てを増築するという設定である。風呂場も便所³⁹もない台湾式の家屋に慣れていない安子のために、清文は家族の反対を無視して新居を構えたのである。作者は新築の屋敷について次のように描いている。

陳家在来の凹字形をなした建物の、一方の翼に接続して洋風の二階建てが増築されたのである。とくに安子のために八畳の座敷が一つ作られた。もちろん便所もあるしシャワーの付いたタイル張りの風呂場もある。それから洋式応接間と書斎、いかだかづらの棚のあるテレス、南国の星々を仰ぐ屋上庭園など、それに比べ陳家旧来の住ひは棟のピンとそつた幾つもの房の集りで、苔むした垣牆^{かきね}を繞らし竹林で囲まれた純支那風のものであるから、そのモダンな増築とは凡そちぐはぐな対象（ママ）をなしてゐた。⁴⁰

その「苔むした垣牆^{かきね}を繞らし竹林で囲まれた純支那風のもの」と近代的な設備が付いた「モダンな増築」との対照的な描写には、新（文明的）・旧（未開的）文化の衝突と優劣が顕著化されている。また、新居は二階建てなので、

その屋根は庁堂の屋根より高くなり、陳一家にとってその建物は目障りな存在であり、台湾的なしきたりに挑むような象徴でもある。従来、台湾人にとって庁堂という所は、家族の求心力を凝集し祖先の位牌を祭る神聖不可侵の場所である。しかし、日本間のある近代化の要素を有した安子の新居は、台湾的なものをはるかに凌駕した構築で、主体意識の強調は明らかである。物語の舞台を台南に設定したことには、実際のところ、作者の地縁的な考慮があると考えられる。庄司は十歳のときに、「先に台湾に渡り卑南の官立病院に勤務している父のもとへ」⁴¹、家族そろって台東に移り住んだ。のちに父が台南で病院を開設するに伴い一家は台南に転居し、庄司は台南で小、中学校を終えたのである。ゆえに、作者の台南での生活経験、見聞などが『陳夫人』のなかで物語化されることにもなった。安子の新居についての「家屋改善」の描写はその一例である。当時、皇民化運動の実施に対し、台湾総督府はもちろんのこと、地方官庁も積極的に取り組んでいた。

1938年3月4日に台南州が「本州皇民化ニ関スル件」を頒布し、中には、「正庁改善ニ関スル件」「位牌更新ニ関スル件」「服装ノ改善ニ関スル件」「家屋改善ニ関スル件」「個人便所浴室ニ関スル件」「演劇講古ニ関スル件」「廟ノ改築ニ関スル件」「道士ニ関スル件」⁴²という八つの具体的な要項がある。近藤正己はその中の「服装の改善」「家屋改善」そして「個人便所・浴室の設置」という州政府の要請は「まさしく台湾人の伝統的日常生活への干渉であり、その旧慣の打破であった」⁴³と指摘している。実際のところ、台南州は総督府よりも早く皇民化運動に関する具体的な要項を打ち出し実施した地方官庁である。『陳夫人』の舞台を台南に設定する構造には、庄司なりの地縁的な考慮があるほか、台南州においては積極的に実施された正庁、家屋改善などの一連の皇民化運動に直面した庄司の肯定的な立場があると言える。

ゆえに、安子のために建てた新居は台湾的なものが崩壊していくことをほのめかしている。

長男清文の二階は庁堂の屋根を見下ろしてある。永い歴史の伝統によって作り出された秩序と調和が、あのハイカラな建築の一角から崩れて

いくのだらうと、ことに年寄達は嘆いた。⁴⁴

引用のように、旧文化が結局のところ崩壊していき近代的な力に抵抗することができない、という作者なりの暗示を匂わせている。しかし、こうした清文夫婦の近代的な新居に対して陳一家の人々は、一方では「忌々しく思つてゐる」が、またそれを「物珍しく眺めてゐた」のである。ここでは、作者は近代化＝皇民化という設定を作り上げ、古い「秩序と調和」が破壊された後、皇民としての新生がやってくることを示している。陳一家の人々に近代化を快く引き受けさせたのは日本の独特な入浴文化であり、その影響は弟の景文と瑞文をはじめ、年長の阿山にまで及び、彼らは新居へ日本式の風呂に入りに行くことによって、近代化の利点を思い始めた。前にも取り上げたように、「個人便所・浴室の設置」という日本式の生活改造には、台湾に関する生活方式や旧慣を打破する当局の狙いがあるので、当時台湾人からの反発を招いたのは避けられないことである。しかし、『陳夫人』においては陳一家の人々は、最初新居の素晴らしさを疎ましく思っていたが、「文明開化」（＝入浴の快楽）を味わった後、釈然としないながらもそれらを引き受けたと描かれている。そこから庄司は異文化融合がもたらした葛藤や陣痛を巧みに日本の独特な入浴文化によって解消させ、一つのサンプルを読者に見せた上、皇民化の要請を『陳夫人』のなかで具現化しようと試みたと言える。

3. 乗り越えられない「血」の障壁

『陳夫人』には、日台共婚の異種混血で陳一家の従来の整った家庭秩序の崩壊が描かれているが、もう一つの混血問題は台湾人と原住民の混血である。原住民の妾を作ったため、安子に擲擻された三男の瑞文はその代表である。命を救ってくれた恩人である陳陣（原住民）の「可愛らしい動物のやうに野性的で同時にあだつばい感じ」に瑞文は原始的な魅惑を感じたが、生粋の生蕃と共婚したことで「よく自己嫌悪に陥る」のである。彼がこだわっていたのは、清文を悩ました「血の問題」と同じものである。とはいえ、瑞文の相手は従来未開の象徴である客体化された原住民で、彼自身は文明開化の主体象徴である。日本統治期の台湾においては、日本人にしてみれば台湾人は

客体的他者でありながらも、原住民にしてみれば主体的他者でもある、という曖昧な二重身分を有する。原住民は最初中国からやってきた漢人から差別待遇を被ったほか、植民地化に至るとさらに日本の統治を受けなければならなかった。

17世紀に溯るなら、台湾島の主体であった原住民は、大航海時代の他者(スペイン、オランダ)の支配力に直面した時、一変して客体的他者という被支配の次元に転落していったのである。また、1683年に台湾は清朝の領地となり、漢人の台湾統治期に正式に入ることになったが、その「漢人による台湾開拓史は、一面、漢人による原住民の圧迫の歴史でもあった」⁴⁵。中国から台湾に移住してきた漢人は西洋の侵略者と同じく、文化水準や生産技術において原住民を凌ぎ、原住民から農業耕地などの住居空間を奪い取った。ゆえに、漢人と原住民との間に新たな主客転倒の力関係が生じたのである。

(1) 主体と客体の転倒

坂口れい子の「時計草」⁴⁶では、純の父親山川玄太郎は、理蕃指導員として原住民と共婚する際に、「文化人の血を山の人達の中で育て、ゆく」という「民族経営」の戦略的な決意をしたのである。その中に原住民の未開文化を開化させようとする理蕃政策を順調にやり遂げるための自己犠牲の目的意識が隠されている。このような決意にはたとえ感情的なものが入ったとしても、国家への奉仕精神が相当な比重を占めたに相違ない。それにひきかえ、『陳夫人』の瑞文は個人的な感情で未開の原住民女性にひかれたことに「自己嫌悪に陥」りながら、自己救済の道を見つけようとした。それだけに、内台共婚をした体験者である安子も瑞文のこの恋を「それは感心した必然ぢやないわ。だけど、瑞文さんもよつぽどどうかしてゐるのね。何も好きこのんで生蕃の女なんか夢中にならなくてもいゝぢやない。馬鹿々々しい」と受け止めた。いわゆる「生蕃」は「高山蕃」とも呼ばれており、そもそも漢化されていない原住民を指している。作品中、都会娘のおしゃれより鉄砲や銃猟に深く興味を持つ陳陣について「生粋の生蕃でないにしても、生蕃の混つてゐることは疑ひない」と描写されることから見れば、彼女は完全に漢化や日本人化されていない原住民である。いつも貴公子の格好をしていた瑞文は、こうした

未開的で野性的な女性と肉体関係をもった時、「売笑婦を初めて知ったときの気持ちもこんな風であらうかと思はれる嫌な後悔幻滅を感じさせられた」のである。文化の低劣より彼が美のところこだわっていたのは陳陣の血縁というものである。その「自己嫌悪」かつ「嫌な後悔幻滅」の気持ちに付きまといわれた自分を救済するために、瑞文は陳陣の血縁に西洋人の血の繋がりがあるかどうかを密かに調べ、ようやく一つの手文庫によって陳陣の部落の住民がかつてオランダ人の宣教師と共婚していたことが証明される⁴⁷。それはすでに二世紀前のことであるが、彼にとっては自己救済できる極めて貴重な象徴となった。

オランダ人と蕃人は婚を通じたといふことから、陣の体にも白人の血が — たとへ大海の一滴にもせよ — 入つてあるといふことだけで沢山だった。

もちろん、かうした浪漫的な感興はしばらく後に、 — つまり紅毛人の血筋をひいてゐる事実を確証した後に起つたことであつた。それで彼はたゞの蕃女と関係してゐるといふ屈辱感から救はれた。血の問題にこだはつたのはそのため、実は初めて過ちを犯したときひどくいやな氣がしたものであつた。⁴⁸ (傍点は筆者)

自文化中心主義の偏見かつ主・客体の優劣関係が作られるもつて、植民地における異種混血はあくまでもロマンチックな出来事ではない。庄司総一が構築している異種混血の「清濁併せ呑む」理想図には、実際のところ理不尽の響きが隠されている。瑞文の屈辱感はその証であり、陳陣の血縁に文明開化の因子である白人の血が「たとへ大海の一滴」ほどでもあれば充分で、彼を屈辱感から救ひ出すことができる⁴⁹。当時における原住民／台湾人／日本人の力関係については、庄司総一も『陳夫人』のなかで明確に描いている。

これは平地蕃で、昔支那から渡つて来た移民と接して交易をしてゐるうち、文化の低劣から土地を奪はれ生活をせばめられていき、次第に台湾人といふ名の下に彼等に同化して、固有の風俗習慣と言葉を失つた民

族のことである。だから、日本の統治下になつて一視同仁の制度の下でも、なほ平埔は日陰者の屈辱を感じて生きなければならないのだ。⁵⁰

庄司のこうした描写は、日本が唱えた「一視同仁」のスローガンと現実の状況とに相当の懸隔があることをうかがわせる。それは乗り越えられない「血」の障壁である。相当同化されている平埔蕃でさえ、「日陰者の屈辱を感じて生きなければならない」ことから見れば、陳陣のような完全に同化されていない原住民の屈辱は当然であろう。日本人（植民者）>台湾人（被植民者）>原住民（二重の被植民者）の権力構造図は、「植民者は《少数者》として暮らしているにもかかわらず、劣等化されているとは感じない」⁵¹ 不均衡の状態である。とはいえ、主体的他者である優越した日本人に対面した時、台湾人は客体的他者の地位に転落していくにもかかわらず、もう一人の客体的他者である原住民に対しては、一転して優越意識を持つ主体的他者の役に扮するようになる。これについて、瑞文、陳陣、そして、安子三人が一緒に登場した場面を見てみよう。そこには、植民台湾における日本人>台湾人>原住民の不等辺の権力構造図が赤裸々に表れている。

「熱い晩ね。まるつきり風がないー」

門から歩道に出る安子は、手で顔を煽いだ。うつかり扇子を忘れてきたのだった。

「おい、奥様にお前の差し上げて」

直ぐ利かして、瑞文は少し離れて後から従うて来る陣に命令した。すると、安子もくると後を向いて、

「多謝」

とぞんざいに云つて、怯づ怯づ差し出す陣の手から扇子を受けとつた。現れた動作ではそれほどでもなかったが、気持ちのうへでは何となし無理にひつたくつた感じだ。そして受けとると直ぐまたくると向き直つて、パタパタとせはしく煽いだ。すると、茉莉花に似た幽香がすつと鼻に来た。（中略）

「あなたが妾をこさへる人だとは思はなかつた。あなたもやつぱり本

描写のように、安子の主体的な地位に直面した瑞文と陳陣はともに自主性を失い、従順に従うしかない客体的なものになる。しかしながら、もっとも劣勢の次元に置かれた陳陣は安子の上位の勢いに「怯づ怯づ」服従するほか、次位に立つ瑞文からの命令も受け取らなければならない。彼女は瑞文の実妻にもかかわらず、蕃人の身分にあつて最初は雇われた女中という名目で陳家に連れて来られた。瑞文は陳陣の血縁にこだわっていたが、実際に「女のお蔭でかへつて彼の軟い弱い精神が固く踏みかためられ、人性における行為に対する生々とした張合ひを感じるやうになった」のである。言い換えれば、瑞文の主体としての強者意識は弱者の次元に置かれた陳陣によって呼び戻されたものである。しかし、陳陣は野性をもつ原住民として描かれているが、最後に彼女は、瑞文の妻春鶯が不注意に犯した過ちを引き受け春鶯をかばったため、家族の皆に許されず陳一家を出てしまう⁵³。彼女は「近代化」されていないが、実のところ毒蛇にかまれた瑞文を救ったのみならず、我を顧みずに春鶯を助けた高尚な「犠牲的精神」の持ち主である。ここでの陳陣は、未開的な素質があつたとしても、勇敢で無我の人物像として描かれている。こうした自己犠牲的で勇敢な原住民女性は、1943年に『台湾時報』第26巻第5号に登載されている映画脚本「サヨンの鐘」においても見られる。主人公のサヨンは、餓鬼大将のように蕃地の子どもに日本語を教えた原住民少女である。脚本に日本語の常用、改姓名、高砂義勇隊などの皇民運動が取り扱われていることから見れば、この映画は政策的な意図で作られたものだと考えられる。物語の結末は、病気になったサヨンが軍隊に召集された駐在所の日本人の先生を送りに行く途中、激流に流されて亡くなる。彼女を記念するために、蕃地に「サヨンの鐘」が建てられ、脚本の最後に「……今もなほ、蕃社の朝は(ママ)夕なに、鳴り響く鐘の音は、高砂の乙女、サヨンの殉情を永遠に讃へ物語るなり。……」というサヨンの死を賞賛する描写が見られる。注目すべきは、ここでの「殉情」が報国を意味することである。実は、この「サヨンの鐘」は台湾総督府総督長谷川清によって設置されたもので、『民俗台湾』第4巻第9号に、松山虔三がタイヤル部落リヨヘンで撮影した

「サヨンの鐘」の写真も載せられている⁵⁴。陳陣とサヨンの人物像は、すでに「霧社事件」に表れた日本に抵抗した野蛮な原住民像から脱皮し、日本の統治地位に従順にして献身的なイメージに変身しているのである。太平洋戦争の勃発とともに、台湾は南進基地としての重要さも顕著となったため、熱帯南洋でのジャングル戦に適応できる人的資源の動員も急迫の時期に差しかかっていた。この背景の下で「高砂義勇隊」が結成されるようになり、近藤正巳によれば、「第一回高砂義勇隊は日本軍が熱帯性熱病、とりわけマラリアに苦しんでいたバタアン作戦に投入される」⁵⁵のである。総力戦のために原住民を動員しようとする意図は、彼らの「犠牲的精神」を正面から描く『陳夫人』からも読み取ることができる。

(2) 混血児の行方

安子と清文との日台結婚は陳一家の家庭秩序を形式的にも質的にも変化させたのみならず、二人の間に生まれた清子もその混血児の身分に悩まされていた。陳紹馨は『陳夫人』の第二部に呈されている問題点は「血の問題」⁵⁶であるとしており、さらに「血の問題」について単に正統性に拘るのではなく、「より多く文化的歴史的な概念（傍点は原文）」を重んじるべきだと主張している。さらに陳紹馨は「同一共同体に運命を共にするものであれば、いわゆる「血の障壁」自体が自ら消えてしまうと述べている。当時は、客体的他者である台湾人は、「血」の宿命的な束縛から解放されておらず、多文化主義に基づいて構築した「運命共同体」の理想図が彼らの手によって作られたのである。しかし、庄司の『陳夫人』において、果たして血の葛藤は完全に陳一家という「運命共同体」に溶け込み、違和感が生じてこないのだろうか。これについて、次の引用を見てみよう。

清子は本島人と内地人の血を半分半分に享けて生まれた。そして、その育った家と環境からみれば、本島人といふ方が正しいだろう。清子が早くもさうした運命に反感を抱いてある心配が母の安子には察せられたのだった。将来この子がいつれの血を多く増すかは大きな問題であった。清子が本島人の婿を貰ふことは最も正統的な成りゆきであり、事は

いちばん簡単だ。けれども、自分と清文がさうだつたやうに、清子にも親の意に添はない恋愛といふものゝ起る場合もあらうし、本島人の花婿を迎へることを本人が承知しない場合も充分考へて置かねばならない。とすると、いつまでもこの陳家の伝統の枠の中に住んでゐることは、将来いろいろな不幸や災いの種になるに違ひない。⁵⁷ (傍点は筆者)

安子は、「不幸や災いの種」がほかならぬ本島的な「陳家の伝統の枠」であることを意識し、娘清子の幸せのためにその枠から抜け出させなければならぬと痛感している。実のところ、清子の結婚問題について安子は、「できれば清子には内地人の婿をもつてやりたい」といった彼女なりの答えを出している。台湾人より日本人のほうが望ましいという彼女の着眼点は「抗し切れない血の命令」ということにある。実際に、娘の結婚問題に不安を抱えている安子は、夫の清文に本心を打ち明けることができない。

抗し切れない血の命令だつた。出来れば清子には内地人の婿をもつてやりたい—これはたぶん明との結婚と同様に不可能と知りつゝ、なんとなしさう思ひたい。本島人との結合によつて、自分自身の日本的な血がいちだんと希薄なものとなり、やがて消え去つてしまふのだと思ふと、ふしぎなさびしさを感じる。これは夫清文にもあらはにみせることの出来ない、いや自分自身さへも平気で開けてみることの出来ない、彼女の唯一の秘密の匣だつた。⁵⁸

陳家へ嫁に来てすでに二十年経つた安子は、いくら台湾の生活習慣を意識的に習得して自己異化しようとしても、台湾を「故郷」と思う帰属感は到底持てないと言へる。清子が台湾人と結婚すると、「自分自身の日本的血がいちだんと希薄なものとなり、やがて消え去つてしまふのだと思ふと、ふしぎなさびしさを感じる」安子の「さびしさ」には異邦人としてのノスタルジアが潜んでいる。清子に日本人と結婚してほしいと思う彼女の望みは、「時計草」の山川玄太郎が、息子純（混血児）に日本人女性と結婚してほしいと思ひ、日本の血筋を続けさせようとする狙いと同一次元のものである。ヨ一

ロッパ人の優性的な血統に対して、半分黒人の血を継いだ混血児が如何に自分を絶対的な優性の道に導くのかについて、ファノン「血の逆行」の回避ということ述べている⁵⁹。

まず、黒人の女と、混血の女とがいる。前者には、ただ一つの可能性、ただ一つの関心しかない。白くなることだ。後者は、ただ単に白くなるだけではなく、逆行するのを避けたいと思っている。実際、混血の女が黒人の男と結婚すること以上に非論理的なことがあるか？なぜなら、これは絶対に理解せねばならぬことだが、血統を救わねばならないからだ。

ファノンの指摘する「血統を救わねばならない」は、まさに安子が意識した「抗し切れない血の命令」というものである。優性で主体の因子を帯びた「血の命令」は、劣性のもを取り去りつつ、永続的に保ち続けるべきものであるので、陳紹馨が主張した「道義的建設を旗印とする大東亜共栄圏」「温い、文化的歴史的な、努力と創造の世界」を重んじる「運命共同体」という神話的構造を突き崩してしまうのである。陳紹馨のこうした発想そのものは「血の障壁」を乗り越えられないことを承知した台湾人的な解決策と言える。しかし、いくら努力しても、それはあくまでも、「台湾的教養であり、台湾的努力にすぎない」⁶⁰のである。「抗し切れない血の命令」を描き出した庄司も、恐らく創作時点ではその要の点に気づいたのであろう。星名宏修は『陳夫人』の作者は当時「皇民文学」に表れる台湾人としてのアイデンティティを否定するという方向に逆行し、「日台の混血児が、台湾人であることを前向きに受け入れていく」⁶¹ことによって、難問となった民族問題、そして血の問題に解決策を見出そうとしたとしている。しかし、すでに論じてきたように、優／劣、主／客の植民地支配体制が相変わらず堅固なままで、その二元対立の構成をわざとがましく解体させようとする試みは、皮肉なことに、現実離れた空想である。本格的な存在価値は主体である日本人によってしか具現化されないからである。

作品中、日・中混血の鄭成功が「台湾の文化の発祥地点」である台南の赤

炭楼でオランダ人を撃退した話をいとこの陳明から聞かされた時、混血児の清子は「自分は台湾人であつた。何の忌憚もなくさう云ひうることがいまはできる」ことを悟った。こうした配置は、一見混血の葛藤に一つの決着をつけられそうに見えるものの、父親清文が家族揃ってジャバ島に移住しようとするという展開で唐突な結末になってしまう。陳一家が分家となり、清文のパイン缶詰会社も台湾鳳梨株式会社に統合されることになった時、清文はそれをきっかけとして南洋へ赴く計画を立てたのである。清文一家にとっては分家ということで、安子のこだわっていた「陳家の伝統の粹」から抜け出すことができるし、清子の混血の血縁に対してのわだかまりも解消することができるにも関わらず、清文が親子三人これからの新しい生活を開いていこうとする理想地は故郷の台湾ではなく、台湾総督府が積極的に取り組んだ南方政策の「南方諸地方」⁶²—ジャバであった。

当時、南方基地として確立された台湾では、南進政策にかかわる協力の諸要請が盛んに叫ばれていた。「皇民文学」とは異なった姿勢で混血の問題を取り扱ってはいても、『陳夫人』は結局のところ、庄司の提起した問題を依然として未解決としたまま、南進政策に応えることになってしまっている。

4. おわりに

『陳夫人』の最後は、清文一家が分家後の新居の設計を議論している場面である。清文が南洋への移住計画を立てようとしていることが分かった安子は、これからの新居は何処に建てられても、欠かせないものは「愛」だということを深く感じる、と描かれている。「愛」ということで、混血結婚によってもたらされたすべての葛藤を片付ける最終場面には、この作品を竜頭蛇尾に終らせる欠陥があると言える。時代の動きに順応して徐々に旧い殻を破った陳家から離れても、清文親子三人は内的な安堵の状態を迎えることができず、南洋へ赴くことを選ぶという結末は皮肉である。1940年から42年にかけての二年間、台湾総督府は南進政策に具体的方策により一層取り組んでいたのである。41年に台湾は本格的に「帝国ノ南方ニ於ケル基地ノーツトシテ」⁶³認められ、なお42年の『台湾時報』新年号に掲載されている台湾総督長谷川清の「年頭の辞」には、「本島は地理的關係よりして必然的に長期南方作戦

及諸工作の中樞的機能を發揮すべき光榮ある使命を有する」⁶⁴、という明確な表示がある。42年に発表された『陳夫人』第二部によって、その南進政策に協力する、時勢に応えた作者の姿勢を読み取ることができる。自分のパイプ事業で工場設計を受け持った郭萬春に台湾青年の問題を述べるときの、清文の態度からその動きがうかがえる。

われわれは一体いまで日本に何物を give したと思ふ。一千万石の米、十五億万斤の砂糖—それは台湾の自然と土地が与へたものに過ぎんぢやないか。何かもつといふものをもつと豊富なものをプラスしなくちやいかん。台湾と台湾人とはもうそこまで来てゐるのだ。⁶⁵

「台湾の自然と土地が与へたもの」だけではなく、人的な協力も加わらなければならぬという思いは、清文が一家揃って南洋に行く原始的な動機である。それだけに、日本人のように自分の存在価値を生かそうとする本格的な目的意識もあると言える。しかし、統治側が作り上げた堅固な主体的運命共同体からは、排除され、永遠に同化され得ない客体的他者としてあるしかない宿命は、庄司によって巧妙にはぐらかされている。結局のところ、主体の枠内においての客体は永遠に疎外されており、客体の枠内においても主体に同化しようとする力も持っていないのである。皇民化運動、策略結婚、改姓名などの一連の政策は、一つの仮面であり、被植民者を弄んでいたものである。それだけにとどまらず、それらの政略に応えた日本人でさえも、無意識に弄ばれたと言える。庄司総一は、意図的に日台結婚が可能である、という仮想のコンテクストを作り上げたものの、終始主体的他者のまなざしで客体的他者である台湾人を描くのである。彼が構築している『陳夫人』の世界には、台湾人が主体的な素質を持たない癖に、自分が主体であると思ひ込んだ滑稽な一面、そして、主体である日本人が混血結婚の実践者ではあっても、「血」への拘泥から抜けられない矛盾が描かれている。その描写は、植民統治に隠されている理不尽な有様を赤裸々に説いている。

註

- 1 当時の、この作品についての台湾人の評論には、「庄司総一著「陳夫人」－台湾人としての読後感」（作者不詳、『日本学芸新聞』第百号、1941・1・10）、陳紹馨の「小説「陳夫人」に現れたる台湾民俗」（『民俗台湾』創刊号、1941・7）と「小説「陳夫人」にあらわれた血の問題」（『台湾時報』第276号、1942・12）がある。また、日本人の評論は、浜田隼雄「庄司総一の「陳夫人」について」（『台湾時報』第257号 1941・7）、田子浩「陳夫人に就いて」（『台湾文学』創刊号、1941・5）などがある。
- 2 前掲論文「庄司総一著「陳夫人」－台湾人としての読後感」
- 3 前掲論文陳紹馨「小説「陳夫人」に現れたる台湾民俗」
- 4 前掲論文浜田隼雄「庄司総一の「陳夫人」について」
- 5 前掲論文田子浩「陳夫人に就いて」
- 6 塚本照和「再録呂赫若『陳夫人』の公演」－『中国文化研究』16号 1999 p.40
- 7 竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』昭和篇[下]田畑書店 2001 p.167
- 8 前掲注7
- 9 前掲注6 p.42～60
- 10 垂水千恵「呂赫若と『陳夫人』」－『言語文化』第17号 2000 p.47
- 11 この作品の評論について尾崎秀樹の『近代文学の傷痕』岩波書店 1991・6・14 を参照（p.143～145）。新垣宏一「城門」－『文芸台湾』第3巻第4号 1942・1・20
- 12 前掲書尾崎秀樹『近代文学の傷痕』岩波書店 1991・6・14 p.143
- 13 星名宏修「大東亜文学賞受賞作「陳夫人」を読む」－『季刊中国』52 1998 春季号 p.70
- 14 中村哲、竹村猛、松井桃楼座談会「文学鼎談」－『台湾文学』第二巻第三号 1942・7・11 p.109
- 15 本論文で取り扱ったテキストは、台湾の鴻儒堂出版社が復刻した通文閣第三版（1944）のものである。しかし、『陳夫人』の中国語訳は第二部の発表から60年後になってようやく台湾人の訳者黄玉燕によって翻訳され、書名も『嫁台湾郎的日本人女子』（「台湾人の嫁にきた日本人女性」九歌出版・台北2002）に改名されたのである。同じく長編小説である張文環の『地に這うもの』に比べ、『陳夫人』の中国語訳の出版は極めて遅れたと言える。張文環の『地に這うもの』は1975年に東京現代文化社によって出版された後まもなく、翌年に廖清秀が訳した中国語訳が台湾鴻儒堂出版社によって出版された。

『地に這うもの』については、『台湾日本語教育論文集』第六号の拙稿『地に這うもの』に見られる張文環の文学心—脱皇民化運動の軌跡（台湾日語教育学会発行、2002・12）を参照。

また、『陳夫人』の中国語訳本に収録されている台湾人の評論には、巫永福の「根植於台湾本土的《陳夫人》」、葉石濤の「《陳夫人》中文譯本問世」、陳藻香の「讀庄司総一的《陳夫人》」、陳玉璞の「《陳夫人》讀後感」がある。そして、日本人のものには、尾崎秀樹の「庄司総一的《陳夫人》」、川原功の「《陳夫人》：認識台湾的巨著」がある。そのうちの尾崎の文章は、『近代文学の傷痕』における『陳夫人』についての評論を取り出して翻訳されたものである。

¹⁶サルトルは「他者」について「他者は、単に私が見るところの者であるばかりでなく、私を見るところの者でもあるからである。私は、他者が私の手の届かないところにある諸経験の結合した体系であるかぎりにおいて、他者をめざすのであり、この体系のうちにあっては、私も、他の諸対象のあいだの一つの対象として、登場する」（傍点は日本語訳のまま）と述べている。

J・P・サルトル『存在と無』(上) — 第三部「対他存在」人文書院 2005 p.408

¹⁷J・P・サルトル『存在と無』(上) (下) 人文書院 2005

¹⁸J・P・サルトル『ユダヤ人』岩波新書 2004

¹⁹フアンソン『黒い皮膚、白い仮面』みすず書房 2005

²⁰前掲注 16

²¹前掲書『黒い皮膚、白い仮面』— 1 「黒人と言語」みすず書房 2005 p.46

²²サルトルが示す「対自」は「自己にとって存在する存在」、「自由であり、一つの世界をそこに存するようにさせることができる」ものである。前掲書『存在と無』(上) p.584

²³「対他」は「他者に対して」、「他者にとって」という意味である。前掲書『存在と無』(上) p.585

²⁴前掲書『存在と無』(下) — 第三部「対他存在」 p.713

²⁵前掲注 24

²⁶前掲書『黒い皮膚、白い仮面』— 6 「ニグロと精神病理学」 p.172、173

²⁷『陳夫人』第一部三 p.33

²⁸近藤正己『総力戦と台湾』— 第三章「人心の動員」刀水書房 1996・2・29 p.254

²⁹『地に這うもの』において、作者張文環は、姓名を変えたとしても台湾人

は「戸籍名簿の上に、丸の中に台という字のはいつた」「丸台日本人」と呼ばれたことを描写している。これについては前掲注 15 の拙稿を参照。

³⁰台湾総督府編の『台湾日誌』によれば、翌年の 1 月 20 日に共婚法手続き法規が公布され、同年の 3 月 1 日に本格的に実施されたのであり、これまでの日・台・原住民の共婚組は全 594 組であったことが分かる。また、1935 年に至って、「内地人の家より本島人の家に入る者五百八十組、本島人の家より内地人の家に入る者三百六十組合計七百四十組に達した」ということである。井出季和太著 復刻版『南進台湾史攷』南天書局・台湾 1943 p.83

³¹同前掲注 28 p.253、254

³²竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』昭和篇〔上〕田畑書店 2001 p.226～231

³³近藤正己によれば、当時社説の題目は「内台相互移籍の途を開けよ」（1940 年 1 月 28 日）で、具体的な内容は「植民地と日本本土との相互移動を認める一元的な戸籍令の制定を主張していた」ということである。同前掲注 28

³⁴前掲書『近代文学の傷痕』、p.142、143

³⁵『陳夫人』第一部十八 p.272

³⁶サルトルは、「私」の羞恥は「誰かの前での羞恥であり、「私は、私が他者に対してあらわれているようなわたしについて恥じるのである（傍点は日本語訳）」と示している。前掲書『存在と無』（上）—第三部「対他存在」p.276

³⁷それは、玉簾の女中に部屋に排泄物を投げ込まれたり、着物や織物が切られたり、阿嬌に臆面もなく罵られたことである。しかし、汚物を安子の居間に投げ込んだことは「本島人が報復手段としてよくやる方法だ」という庄司の描写について、田子浩は「復讐のために汚物を自分の嫌ひな人のところに投げ込むことは此の世の中には何処にもある筈である、その心理的必然性があるならば、犯罪と同じ様に何処にもあり得ることである。必ずしも本島人の専売特許ではないと思ふのである。表現としては不用意であらう」と指摘している。前掲注 1 田子浩の評論を参照。p.94、95

³⁸『陳夫人』第一部七 p.91

³⁹作品中、作者は台湾の家屋の便所について「共同便所のやうなものが庭の片隅に一つあるにはあるが、それは男子専用のもので、実に粗末な汚いものであつた」と描写している。

⁴⁰第一部三 p.32

⁴¹前掲注 13

⁴²「家屋改善ニ関スル件」についての内容は、「台湾ニ於ケル従来ノ建築様式

ノ廃止ヲ目標トシ改築ノ場合ニハ衛生上ノ見地ヨリ又皇民化生活ノ見地ヨリ
適当ト認メラルル様式ニ改ムルコト」「追テ様式ハ研究ノ上指示スル予定ナ
リ」ということである。前掲書『総力戦と台湾』一第三章「人心の動員」を
参照。p.182~184

43前掲注 42 p.186

44『陳夫人』第一部三 p.32

45史明『台湾人四百年史』一第8章「清朝治下の台湾」p.238 新泉社 1994

46「時計草」については、拙稿「坂口れい子の「時計草」を中心に—異民族統
治への協力—」『天理台湾学会会報』第十号 2000年を参照。

47この場面について、庄司総一は次のように描いている。

「或るとき、陣が近くの部落の家から一つの手文庫を持って来た。分厚い牛
皮を張つた頑丈な匣で紅い漆が塗つてあつたが、その漆の剥げたところから
何やら字がのぞいてゐるのである。皮の地を傷めないやうに注意しながら小
刀で漆を剥ぐと、手筆で次のやうに記されてあつた。

順天命結婚 一六六八年復活祭

Martin Beets 陣麻未 嬰莫

(中略) 手文庫の筆書の年号がこの史実を裏書きしてゐるやうに思はれる。
陣麻未はマルチン・ベーツを漢字に当てはめたものだし、ツオウ族の言葉で
数の五つをエイモといふところから推して、嬰莫といふのも女蕃であつたと
考へていゝ。」(第一部十五 p.235)

48『陳夫人』第一部十五 p.236

49『黒い皮膚、白い仮面』で、ファノン(植民者)の持つ「優越意
識」と黒人(被植民者)の持つ劣等意識を「土着的相關物」としており、さ
らに彼は「劣等コンプレックス症を作るのは人種差別主義者である」(傍点は
日本語訳)と示している。前掲書『黒い皮膚、白い仮面』一4「植民地住民
のいわゆる依存コンプレックスについて」p.115

50『陳夫人』第一部十五 p.233

51前掲注 49 p.114

52『陳夫人』第一部十七 p.276

53その過ちとは、陳家の裏庭で春鶯が不注意で景文の娘美圓の目を空気銃で
撃つた出来事である。それで、その過ちを引き受けて春鶯をかばつた陳陣は
家族の皆に罵られたり、殴られたりしたのである。

54そこに掲載されている写真は「サヨンの鐘」のほか、サヨンの墓など 24 枚
ある。『民俗台湾』第4巻第9号 1945

- 55前掲書『総力戦と台湾』 p.395
- 56前掲論文『『陳夫人』第二部にあらわれた血の問題』 p.117
- 57『陳夫人』第二部七 p.83
- 58『陳夫人』第二部二十八 p.308
- 59前掲書『黒い皮膚、白い仮面』-2「黒い皮膚の女と白人の男」 p.76、77
- 60『ユダヤ人』においてサルトルは、ユダヤ人がさまざまな試練を経て優性のフランス人に近づこうとしながら、自己の存在価値を証明することに努力してきたが、結局むだであると述べている。これについて、サルトルは次のように示している。
- 「対象となったものの本当の価値は、真のフランスのフランス人へのみ達することの出来る価値であり、それは、正に「彼岸」にあるもので、言葉ではあらずことの出来ないものだというのである。ユダヤ人が、その教養、その努力によって、それを推量しようとしても無駄だ。それは、ユダヤの教養であり、ユダヤ的努力にすぎないのだから。このわかり切ったことに気もつかないからこそ彼はユダヤ人なのだ」(傍点は日本語訳) 前掲書『ユダヤ人』 p.101
- 61前掲星名宏修の論文「大東亜文学賞受賞『陳夫人』を読む」 p.69
- 62近藤正己によれば、当時所謂「南方諸地方」の範囲は「香港、フィリピン、タイ、マレー地方、東インド諸島、ビルマ」に及んでいる。その中で、ジャバは東インド諸島に含まれている。前掲書『総力戦と台湾』 p.133
- 63近藤正己によれば、当時、台湾各階層からの南進政策に参加する要請が持ち出されたので、近衛首相は日本閣議で「南方政策ニ於ケル台湾ノ地位ニ関スル件」を提出し、台湾の南進基地としての地位を確認したことが分かる。前掲書『総力戦と台湾』 p.129
- 64『台湾時報』新年号(第265号)1942年1月1日 p.4
- 65『陳夫人』第二部七 p.79

参考文献

- J・P・サルトル『存在と無』(上)(下)人文書院 2005
- J・P・サルトル『ユダヤ人』岩波新書 2004
- F・ファノン『黒い皮膚、白い仮面』みすず書房 2005
- エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』(上)(下)平凡社 2005

- 近藤正己『総力戦と台湾』刀水書房 1996
竹中信子『植民地台湾の日本女性生活史』(上)(下) 田畑書店 2001
尾崎秀樹『近代文学の傷痕』岩波書店 1991
庄司総一著、黄玉燕訳『嫁台湾郎の日本女子』九歌出版 台北 2002
井出季和太復刻版『南進台湾史攷』南天書局 台北 1943
史明『台湾人四百年史』新泉社 1994
台湾総督府編 復刻版『台湾日誌』南天書局 台北
復刻版『民俗台湾』第4巻第9号 1945
『台湾時報』新年号第265号 1942
田子浩「陳夫人に就いて」『台湾文学』創刊号 1941
塚本照和「再録呂赫若『陳夫人』の公演」『中国文化研究』16号 1999
星名宏修「大東亜文学賞受賞作「陳夫人」を読む」『季刊中国』52 1998
垂水千恵「呂赫若と『陳夫人』」『言語文化』第17号 2000
陳紹馨「小説「陳夫人」に現れたる台湾民俗」『民俗台湾』創刊号 1941
陳紹馨「小説「陳夫人」にあらわれた血の問題」『台湾時報』第276号 1942

(bb5421@ms55.hinet.net)